

うきよづかひよくのいなづま さやあて  
浮世柄比翼稲妻「鞘当の場」の渡り台詞

登場人物 不破伴左衛門 名古屋山三元春

山三…刀の鎧、捉えし御方、こりや何とめさるる。

不破…これやこなたへ御免なされい。身はこの廓へ通いつめ、当世  
だだらだいじん 陀々羅大尽と、人も知つたる闇の夜に、吉原ばかり月夜かな、ことに夜  
桜まばゆくも、咲き揃うたる仲之町、この往還をよけずして、何で身ど  
もがこの鞘へ、武士の鞘当て、挨拶さつしやい。

山三…こりやこの方より申すこと、大道広き往還を、我がの物顔の六法  
は、よしや男の丹前姿、模様も雲に稲妻は、もしや噂のそこもとが。

不破…今この廓に隠れなき、稲妻組の闇大尽、その名も高き富士筑波、  
心にたがえば闇雲に、抜けば玉ちる剣の稲妻。

山三…その模様とは事かわり、雨の降る夜も風の夜も、通い廓の  
上林、夜の契りも絶えずして、明くるわびしき葛城と、しつぽり濡れ  
ん濡れ燕、無法無体の行きちがい、よけて通すも恋の道。

〔語彙説明〕

○渡り台詞…歌舞伎で使われる演出技法で、一連の長い台詞を数人の役者が順番にリレーのように受け渡ししながら言い、最後の一句（締め）を全員で揃えて発するものです。複数の役者の持ち味が発揮され、観客に華やかさと贅沢な楽しみを与える効果があり、『白浪五人男』の勢揃いなどが有名です。

○陀々羅大尽…ただら遊びというのは湯水のように無茶苦茶にお金を使う客。

○往還…往来、大通り。

○六法（六方）…俳優が花道から揚幕に入る時手をふり高く足踏みして歩く誇張した芸。

○よしや男…派手な格好をした伊達男。

○上林…吉原仲之町の引手茶屋の名前。

○葛城…吉原の遊女の名前。大夫。不破と名古屋は足繫く通っていた。

## 【概略】

著者・四世鶴屋南北は、名古屋山三と不破伴左衛門との確執の物語に基づいて、「浮世柄比翼稲妻」を書きました。

「鞘当」の場面では、昔同じ佐々木藩に仕えていた二人、つまり、浪人の不破伴左衛門と、ならず者の名古屋山三。

浪人の名古屋は、昔佐々木藩の腰元であった花魁の葛城太夫の恋人です。他方、不破も葛城太夫に惚れていました。

その二人が、太夫に逢いにゆくために、吉原の仲之町の道を歩いているとき、二人の鞘の尻が当たりました。

お忍びで来ていた二人は、深編笠をとり、刀を抜いて喧嘩を始める。